

**眠** るって案外難しいことなのだ、と思うようになった。ぼくは、もともと寝付きが極めてよい方で、だれかと同宿すると翌朝決まって言われることがある。

「どうやったら三秒で寝られる？」

そんなことが感心に値するのかわずつと疑問だったのだが、自分が何の価値も感じていなくてもそれが羨ましい人たちがいるのだ。羨ましいことの大半は、そんなものなのだろうけれど。しょうもないこと、とは思いつつ、真面目に方法を尋ねられたり、分析を試みられたりすると悪い気はしない。

ところが、その特技も怪しくなってきた。すぐに眠れても、真夜中に目が覚める。再び寝ようとするがどうにも眠れない。蒸し暑い夜など寝苦しさを理由にできるが、快適な夜でもままだ。

山小屋での一泊目がやはり眠れない。夜通し運転した上に半日登り続けて疲労が極限に近くても眠れない。次の日も一日登り続けなければならないのに体が持たないのではないかと初めはおそろしかったが、経験を重ねるうちにその程度ではくたばらないということがわかってきて、眠れないことがそれほどこわくはなくなつた。

理屈から言えば、交感神経が昂ぶっていて副交感神経に切り替わっていないということらしく、山行の初日であればざらありなんと思ふのだが、何の刺激もなかった一日の終わりに副交感神経がうまく作用してくれないとなれば、切り替えの不具合が生じているからと考えるほかない。年を取れば衰えるが道理。眠れないのもスイッチが錆び付いているせいだろう。

眠るか眠らないかの二つしかなかった十八の夏。青函連絡船が函館に着いたときには、日はとつぷりと暮れていた。ねぐらを探す面倒も手伝って、北海道上陸初日くらい贅沢するのもいいだろうということにして、旅館を取った。

糊の利いた真つ白なシーツに正座し、なで回す。あこの匂いだ。もう何日も嗅いでいなかった。足を滑らすと木綿の繊維が音を立ててかかとをこすつてくる。これ以上の快を見つければ難しいぞ、などと心中でつぶやくうちに三秒で寝る。

翌朝、迷った末に連泊することにした。函館の五稜郭など訪ね、夜景も見ねばなるまいと思つたからだ。司馬遼太郎の『燃えよ剣』を興奮して読み、五稜郭はどうしても見ておきたかった。しかし、それを上回る動機があつたことも白状しておかなくてはならない。眠ることがいとまたやすかつた夜は、もう二度とやつてこないのだろうなあ。



專業ババ奮闘記 (その2) 66

## 木幡智恵美

コロナ禍の中で (5)

緊急事態宣言(二回目)が解除され、感染が少し収まってきた。合気道の稽古は、六月最終土曜日から、マスクをつけ、一人稽古という形で再開することになった。

そんな六月も終盤に差し掛かった日、娘が美容室に行くので預かってくれと宗矢を連れてきた。乳母車に乗せて歩くと、宗矢はすぐに眠った。一時間近く歩き、あと少しで家というところで泣き出した。急いで家に帰り、抱っこして家の外に出る。木の葉が動くのを見て泣き止んだ。寛大も実歩も、抱いて家の周りを歩きながら、風にそよぐ葉を見せていたつけ。

やがて、娘が帰ってきて、「広末涼子みたいって言われた」とこ機嫌。義母は昼食を摂りながら、畳の上を転がる宗矢に、「しゅうちゃん」と声を掛ける。最初は、「名前はなんだったかいね」と、なかなか覚えられなかったのが、「ゆうちゃん」になり、言う度に、「しゅうちゃんですよ」と繰り返すうちに、時々は間違えるものの脳に刻み込まれたようだ。

寛大が産まれた時は、まだ義母もデイサービスに通っておらず、杖だけで歩いていたし、物忘れもさほどひどくはなかった。私はまだ囑託の仕事に就いていて、家で産後の身体を休めている娘や寛大の世話を十分することができずにいた。「栄理ちゃん、抱っこしてるから、その間に食べなさいって、お祖母ちゃんが言ってくれて、随分助かったよ。お父さんよりお祖母ちゃんによく助けてもらったわ」と、娘が言っていた。

実歩が産まれた頃から義母はデイサービスに通い出したが、それでも、「ちよつと抱かせて」と言つて腕を広げたし、「抱いちよくけん、用事しない」と実歩を預かってもらった。

「東京に出て、大学の先生の家でお手伝いさんしちゃってね。先生の子どもの子守もしたよ」と、娘時代の話を耳にしたことができるほど聞かされた。近所の小さい子の面倒もよくみてあげたことだ。我が子が小さい時、働きに出る私に代わって、長女は二歳(それまでは私の母が子守)から四歳まで、長男は産まれてから三歳になるまで、二男は生後九箇月まで、家でみてくれた。

そんな子ども好きの義母も、宗矢が産まれてすぐに満百歳。「もう抱かれんわ」「落とすといけんけん」と、「しゅうちゃん」の声を掛けるだけになった。

**30代フリーター** やあ、ジイさん。日本人は平和ボケなので、タリバンにカメラを向けられたら殴られたとか、カメラを取り上げられたとかといったことを聞くと、タリバンは野蛮だという話になるが、そんなことは軍隊や警察ならどこでもやっていることだ。そんな趣旨の話をイスラム法学者の中田考がユーチューブで語っていた。

**年金生活者** 私はそのリアリズムに啓発され、賛同する一方で、「平和ボケ」は戦後の日本人の美点なので、「ボケ」から覚めたりしないしてほしいとも思った。

「平和ボケ」の核心にあるのは、何があっても戦争だけはしたくないという願望だ。それは主観的なものだから、もしどこかの国が攻めて来たら、そんな願いは打ち砕かれる。リアリズムを欠いたその危うさを揶揄して「ボケ」という言葉が使われたのだろう。

しかし、この「ボケ」は戦後の日本で力を発揮してきた。非戦・非武装をうたう憲法9条が変更されずに維持さ

には政府あるいは時の政権にとつての厳しさであつて、生活者である一般の国民にとつてはむしろ「平和ボケ」する余裕ができたということでもある。

**30代** 戦争の本流はいつ替わつたんだ。

**年金** 東西冷戦からだ。核兵器が人類を何度でも絶滅させる力を備えたために、使えない兵器となり、それが世界規模の熱い戦争、リアルな戦争を抑止するようになった。しかし、東西冷戦当時はまだ熱い戦争、リアルな戦争への志向が強く残っていた。核による世界戦争が抑えられたぶんを取り戻すかのように、使える兵器である通常兵器を使用した局地戦が行なわれた。東西両陣営の代理戦争となつたベトナム戦争はその代表的な例だ。

東西冷戦が終結したあとも、熱くリアルな局地戦は相次いだ。アメリカの主導で始まつた湾岸戦争、アフガニスタン戦争、イラク戦争がそれだ。しかし、アメリカはアフガニスタンとイラクで反米武装勢力の抵抗に遭つて泥沼

れてきたのはその力があつたからだ。その9条の定めを通りわが国は一度も戦争をすることなく今日まで来た。

**30代** 日本が戦争をしなくて済んだのは、日米同盟が他国からの侵略を阻んできたからで、9条のおかげではないという主張がある。

**年金** 日米同盟が侵略を抑止する力になつているというのはその通りだ。だが、もし9条がなかったら、日本はアメリカに言われるままベトナム戦争やアフガニスタン戦争、イラク戦争に参加していたに違いない。

故中村哲が治安の不安定なアフガニスタンで長年にわたつて医療や灌漑工事などの支援活動を続けることができたのも9条を背に負つていたからだ。その9条はわが国民の「平和ボケ」によつて支えられてきた。それはいまだ戦争の消滅しない世界で戦争のない未来を先取りした態度であり、カメラを向けると殴るような軍隊を野蛮と感じるほど先進的と言える。

**30代** 中国の海洋進出をはじめ安全保障にはまり込み、撤退を余儀なくされた。この敗戦はアメリカの戦争遂行能力の著しい低下をあらわにした。おそらくこの超大国は二度と同じような戦争をすることはできない。まして中国と戦火を交えることなど考えられない。これもまた「平和ボケ」には好都合だ。

**30代** それでも偶発的な衝突の危険は

障環境が厳しくなつているのに、何を寝ぼけているんだ、と批判や嘲笑を受けそうだな。

**年金** 「安全保障環境が厳しくなつた」という見方そのものに私は疑問を抱いている。

何度も言つてきたように、現在の世界の戦争の本流は、破壊と流血をとまなう熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争に移つている。それだけ生命が脅かされる危険が遠のいていくということであり、そのぶん「平和ボケ」には住みやすい世界になつている。その意味では安全保障環境はかつてより厳しさがゆるんでいると言える。

しかし、抑止力の競争は軍備の絶えざる更新とそれにとまなう膨大な支出を強いる。おそらくその更新の速度と費用は、最後の熱い世界戦争となつた第2次世界大戦のときよりはるかに増していると推定される。その意味では全保障環境は厳しさを増していると言ふこともできる。ただし、それは直接

なくならないし、それが熱い戦争の引き金になるかもしれない。

**年金** それが社会に慢性的な緊張を強い、膨大な軍事費用は民衆の生活を圧迫している。それを取り除くには、冷たい戦争、バーチャルな戦争そのものをやめさせるしかない。核兵器禁止条約はそれ目指す画期的な条約であり、非戦・非武装をうたう日本国憲法9条の核兵器版だ。その9条を支えてきたのが日本国民の「平和ボケ」にはほかならない。

「平和ボケ」の核心にある、何があつても戦争は嫌だという切実な願望を日本国民だけでなく、全世界の政府と国民に共有するよう働きかけ続けること、それを安倍晋三の「積極的平和主義」の言い方をまねて「積極的平和ボケ主義」と名づければ、それこそ冷たい戦争、バーチャルな戦争を止める力のひとつとなり得る。私たちの国は憲法9条を世界中の国々が見習うよう働きかけ続ける使命を歴史から負わされている。

ニュース日記 798  
**中村 礼治**

## もっと平和ボケを